

# 「平和団塊」の二〇〇年人生

〈初の「三世代平等社会」を達成〉

堀内正範 元『知恵蔵』編集長

(筆名 堀 亜起良 東洋哲学者)

その第二 多様性を担う女性と家族のかたち

I マイホーム意識を改める

団塊親子の「同室異夢」

パラサイト・シングルの安息

若い女性は順風を受けて

II 老々介護という日々の命の輝き

どうする？ 孤立無援のマイホームパパ

一人暮らしに備えるマイホームママ

大正生まれへのオマージュ（賛辞）

III 女性主導のライフ&ワーク

M字型から一文字型への永年就労

「三世代平等同居」を標準に

暮らしの知恵を次世代に伝える

## I マイホーム意識を改める

### 団塊親子の「同室異夢」

「その第一」では一人ひとりのかけがえのない「一〇〇年人生」をどう生きるかについて考察しましたが、ここではともに暮らす「家族」の立場から、うちの三世代がそれぞれその社会とどうかかわっていくか、「家族のかたち」が街のかたち」という視点で、とくに女性の側からそのありようを検証したいと思います。

この「家族のかたちが街のかたち」という視点の必要性は、二年におよぶコロナ禍のもとで、「国民のいのちと暮らし」を守るための対策が政府と自治体の首長との要請によじれが生じて、国民としてか市民としてかの判断に迷ったことにあります。

「家族感染」の不安さえかかえながら過ごすことになった日々。支え合うご近所さんから町民・市民・県民、さらに国家を支える最小の単位である国民として、どの「民」の立場で「いのちと暮らし」を守るか。考慮のすえに、「家族のかたちが街のかたち」という視点で「地域共生社会」づくりにかかわることがすべてに優先する課題である

ことと気づいたことによります。

したがってこの検証に当たっては、「標準家族」といわれて親子四人で暮らしていられた年月を振り返ることから・

・マイホーム。

なんともいえず響きのいいことばです。これほどまでやわらかい生活感を内包しえたカタカナ語を他に探すのはむずかしいほど。耳にすると心が安まります。

・マイホーム。

繰り返しても温もりは変わりません。

なんともいえない、そこはかとない温もり。ですからそのぶん「ホームレス」ということばがそこはかとない侘びしさを伝えます。

それはいま高齢者となっているみなさんが、若い日からそれぞれの人生をかけて、前世紀後半の五〇年をかけて、その内容をつくった和製カタカナ語だからといっていいでしょう。

ですから細部の意味合いは個人によって異なります。日復一日、よき（良き、好き、善き）もの、ひよわなもの、やわらかなもの・「いのちと暮らし」を守る小さな城として、「マイホーム」は先行の「家庭」や「わが家」に負けない温もりをカタカナ日本語として持つに至っています。

思い起こせば、戦後っ子だったパパとママは、「企業戦士」とか「ワーカホリック」（仕事中毒）といわれた強直な先輩に、「マイホーム主義者」とか「マイホームパパ」「マイホームママ」とからかわれながら、団地の二DKで身を寄せ合って暮らして、二人の子どもを育てたのでした。国家から企業へそして「家庭」へと「民」の人生の軸が移る現場に立ち会ってきたのです。

マイホームパパとママは、その後、二DKの団地の二段ベッドで育った二人の子どもたちにそれぞれ一部屋をと考えて、というより子どもたちにせがまれて、職場までは遠くなっても、郊外団地からさらに遠いプレハブ一戸建ての三LDKに引っ越ししました。そう願ってそうしてきた「団塊」のひとり藤谷さんは、「マイホームパパ」の実現者だったはずなのです。ママはPTAで知り合った友人と趣味やスポーツに熱中してすごせし、人生模様はいろいろでも、そういう暮らしの体験をもつ人は少なくないでしょう。

首都圏の都市郊外の三LDKで、夫婦と子どもふたりの「標準家庭」の実現者として四人暮らしをしてきた藤谷家の「マイホーム」に、亀裂が生じているのです。

藤谷家は家屋も年を経て相応に傷んでいますが、大手の建設元にも当時の資材がなかったり、というより費用がことのほかかさむので修繕が悩みようです。

あのころは不安もなく人生のはるか遠い地点まで見透かして、可能なかぎりの費用

を工面してマイホームを獲得して、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。来し方を顧みて家庭での自分の存在感の薄かったことを感じている、と藤谷さんはいいます。

みずからの希望を抑えて、家族の希望をかなえることを優先してきた長い年月。

応接セットや家具といった家族共用品はそろっていても、自分のために求めた専用品というのは壁にはりついた本棚以外になくて、「モノと場」に表わされる当主としての存在感が希薄だったことにいまさらながら気づいたというのです。

子どもたちが自立をせず、夫婦と子どもふたりの「核家族」の形をそのまま保っている藤谷家。いま地域住民の「標準家族」というのは、娘や息子が三〇歳をすぎても親元から出て行かない藤谷家のような家庭ではなく、子どもたちが巣立っていき、年寄りふたりになり、さらには年老いた女性のひとり住まいになるとというのが標準の姿だといいます。

どこで藤谷家は標準からはずれたのでしょうか。

外から見るとかぎりでは標準的な「しあわせ家族」の形を保っているのですが、いま「しあわせ家族」ではないという理由が、話しているうちにわかってきました。

子どもたちが自立をせず、家が「エンブティ・ネスト」(子どもがいなくなった空の巣)とはならず夫婦と子どもふたりの「核家族」の形をそのまま保っている藤谷

家は、どこで標準からはずれたのでしょう。

### 「パラサイト・シングル」の安息

「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんでいる上に、子どもたちは最も恵まれている友人のあれこれを取り上げては不満の材料にします。そんなことは自分の力でするものだと父親からいわれると、あとであんなことをいう父親なんてと母親に訴えて解決するのだそうです。そとで起きたできごとに対しては、「早く帰っておいで」と抱きかかえているやさしい姿を藤谷さんは何度となく見てきました。

標準家族というのは、育った子供たちがそれぞれの希望に合わせて巣だっていき、両親はさまざまな子そだでの記憶のなかで暮らしているのだというなら、二人の子どもが「パラサイト・シングル」ですから、「サッカーならイエローカード一枚ずつとあったところ」と、藤谷さんはいっしょに暮らしている子どもにペナルティを与えています。家庭内でペナルティを与えたところで何かが変わるとは思えないのです。

イエローカード一枚の藤谷家のひとり娘については、「子団塊」のあおりを受けて就職難でしたから、短大を出てからずっとフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。気ままに過ごしてきたのに、近ごろはわが家に結婚資金の準備がなかったからオヨメにいかなかったのだといえます。いい相手がいれば何とし

でも費用は工面するといってきたはずといっても、いまさらと聞き入れません。

「お前こそヒツペガシ娘！」と娘にいい返せない優しい高齢者が、うかうかしている  
と居場所もない、おカネもないになりかねない世相だといえます。

それは貯蓄をしなかった親が勝手に言ったり考えたりすることで、友だちの両親は  
自分と子どもの将来のために黙っていてもすっかり貯蓄をしているのにと、父親の子  
どもへの配慮のなさをあげつらいます。妻によればそれは娘が小遣いをせびるとき  
切り札なのだそうですが、後輩の社員がそれほど保険やら貯蓄に熱心だったとは定年  
になるまで知らなかったと藤谷さんはいいます。

近ごろ女性のしごとは「ダイバーシティ」（多様性）が騒がれて多様に用意されて  
いて、女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるとはいうものの、どれほどの  
女性が実力で仕事をし、自分のかせぎで暮らしているのだろうか、ローライズ・パ  
ンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそいつものデイオールのパーティ  
ー・ドレスに着替えて「変衣変性」する娘の姿をみながら、藤谷さんは際限なしの  
「女性化」には懸念を感じています。

娘が女性優遇の勢いに乗ってそんな生き方をすることにグチをいう父親への批判を  
口にするようになったことを藤谷さんは不愉快に思っています。娘自身が当時はあんな  
ケバケバしい装飾の式場で式を挙げるなんてといっていたのに、いまになって家に

蓄えがなかったのが結婚をしなかった理由で、はじめから諦めていたといわれるのはつらいですが、それに近い額の貯蓄しかなかったことはたしか。でも自分の人生選択が間違っていたとは思えないのです。

藤谷さんは団塊世代でも人口最多の昭和二四年（一九四九年、平成二七年国勢調査で二一六万人）の生まれ。奥方は一つ下の「ぶらさがり団塊」である昭和二五年の生まれ。結婚が遅かったために、子どもたちからは年とった両親はイヤだと無理難題をいわれたりするそうです。

\*アノヒトとかヒカラビてる人とか

藤谷さんが定年で家に居るようになって、娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボ・ジジババ」といっていることがあります。時には父親に対して「アノヒト」、母親には面とむかって「キミ、元気かね？」とか「オマエは・・・」などと軽くあしらわれていると感じることがあるといいます。

小うるさい姉と違って寡黙に暮らす同じくイローカード一枚の下の息子については、浪人暮らしはしたもの、ごく普通の大学をごく普通に卒業して、就職試験を受けて勤めはじめた普通より名の知れた輸送会社だったのに、短期でやめて家にいるのだそ



うです。

親のひいき目でもしっかりしてきたように見えるので、子どもの自主性にまかせているのですが、とうより言っても聞かないから気ままにさせているのですが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやスマホで情報のやりとりをすすめているとのこと。父親が「ニート化」(NEET)。就業を希望しない若年無業者)を心配するのを先回りして、時折り出かけて「職さがし」をしているといいます。

いずれにしても子どもふたりにとって、自分の部屋が「パラサイト・シングル」である自分たちにとってたった一つの安息の場なのです。

しごとが不安定で収入に対する将来予測がつかないこと。親におカネの余裕がないこと。家が狭くて子どもが結婚しても二世帯がいつしよに住める場ではないこと。それらが藤谷家の「マイホーム」に起こっている亀裂の原因だとしたら、藤谷さんのような「マイホーム」のお宅は特別どころかよくあるケースといえそうです。

おカネのない父親には関心も薄くなり、父親の存在などくに意識をせずに気ままにすごしていますし、車は自分ひとりか妻との買い物の場合は運転しますが、娘や息子と乗り合わせる時には運転させてもらえないし、パソコンはワープロ専用で、情報源やコミュニケーションの手段にできない親父を軽視していることはありあり。実はネットとEメールは利用していたのですが、迷惑メールの多さに迷惑していたとこ

ろに、ウイルス（ランサムネイルというおカネを要求する悪質なもの）に罹ったのを機にEメールはやめています。

「技術を悪用する人間が土足で家に入り込んできてウイルスまで移すのは我慢できない」というのが理由です。子どもたちの軽視と不平には、「この家はわたしが名義人なのだ、といたいたいですけれど、愚かしいですしね」といって苦笑します。

壁面に娘が貼ったままの「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには底値までさがつた土地の築三〇年という家の壁に存在感があるわけではないですし。

どうやら藤谷家は「同室異夢」といったようすなのです。

### 若い女性は順風を受けて

「少子化」の時代に、若い女性を「時代の花」としてひたすらに擁護し、甘やかす風が巷のすみずみに吹いているのはたしかです。両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じての家庭内ヒッペガシを当然の権利と考えています。孫たちの教育費一五〇〇万円までを無税譲渡するよりも、いま目の前で必要としている娘たちの社会教育費としてまわすべきだというのが論法です。

女性の登用については、国際的にはダボス会議の「男女格差報告（ジェンダー・ギ

「ヤップ指数」で、日本はこれまで長く一〇〇位以下という女性の活躍の低さが指摘されてきました。それが改善されるためにはもっと多くの「実力ある女性」の社会進出が必要でしょうが、実力の培養を待てずに女性の登用をすすめています。経団連や同友会までが「ダイバーシティ（多様性）の推進」として積極的に活動の場の形成に つとめています。袋叩きを承知でいえば、男女平等より女尊男卑といった情景に出合います。二千年の男尊女卑の期間を思えば「一〇〇年人生」を耐えて当然のプロセスでしょう。

若い女性への追い風は、国際的にも、経済界からも、そして政界からも吹いています。ですから家庭での女の子は特別待遇ですごしています。

その潮流は東京都議会議員選挙で小池百合子知事率いる「都民ファースト」の会が推した一七人の女性が全員当選しとときに際立って見えました。

テレビの画面はご覧のとおり、すでにどのチャンネルのどの番組も若い女性たちで占められています。若い男性が脇で支えています。主役の女性の傍らに出てきません。ないことが求められ、高齢者は違和感があるので広告以外には画面に出てきません。「水準の低いオンナ子どもメディアに出る気はしない」などと不用意に言ったりしたら、差別発言とされてメディアから干されてしまうような勢いなのです。

内閣府の「人生一〇〇年構想会議」の議論にしても、リンダ・グラットン女史をは

じめ中年委員の中年世代のための構想であって、いま「一〇〇〇年人生」を送っている先人への関心と配慮では動いておりません。

佐藤愛子『九十歳。何がめでたい』が一〇〇万部を突破。「一〇〇万部。何がめでたい」といいきれる九〇歳代の女性作家は時代の空気に合流しえています。『遺言』を書いた養老孟司さんによれば、その人気ぶりは明るいこと、感情的にもっともとう気にさせること、そしてお説教をしないことだとい、こういう本が売れるのはある意味よくないことで、ぼくは喜んでいませんよという。現代をたくましく生きる女性のための笑って泣いての箴言集なのでしょう。

一方で長年連れ添った夫に先立たれて、年金を失って「下流老人」と呼ばれることになる高齢期の女性がいます。おカネがなくて一日一〇〇円でも生き抜く覚悟があり自負があり、ひもじさと貧しさからはじまりまた貧しさとひもじさにもどって終わる人生を受け入れて、国や自治体の救済をみずから求めようとはしない老婆です。

若い女性やIT青年たちとともにシルバーかプラチナのように輝いているはずだった高齢者が、居場所もなく、語る明日もなく、「だれもが安心のできる老後」どころではなくなっているのが実情です。「孤立無援のパパ」や「自立遊戯のママ」が人に知られず逆風を感じながら生きています。

## Ⅱ 老々介護という日々の命の輝き

### どうする？ 孤立無援のマイホームパパ

同じ「団塊」の山野さんも親子四人で暮らしてきましたが、藤谷さんと違って、子どもはそれぞれに家を離れて独立し、久しく夫婦二人きりで暮らしています。

親しい友人の青木さんと「介護付き有料老人ホーム」の見学にいった妻を送り出して、ひとり、テレビ画面をみている山野さんの目の前で、

「デフレは高齢者が資産を塩漬けにしているからです」

億ションを所有してカネ儲けの実務にも抜け目がないと評される経済学者が解説で断言します。日本経済の停滞はそれが理由のひとつだといひ切ります。そんなとき山野さんは身を乗り出して、

「資産の塩漬け？ バカいなよ。カネしか見えないのか」

と画面の解説者に向かって大声で抗議します。呼吸が荒くなり不整脈が出ているのもわかるのですが、止めるわけにいかないのです。

塩漬けにできるような資産などどこにもないし、わが家では出て行った娘と息子にヒツペガシ（資産移譲）されてしまったから・・・。

高齢者の「平均貯蓄額」が二三七〇万円という解説がはいり、暮らし向きに心配のない高齢者が七割を超えると暮らし向きに心配のなさそうな若いアナウンサーが添え

ていいいます。

こんな平均の数字をだれが信じるのだと山野さんはまた画面に抗議します。

年金の不足額二〇〇〇万円という数字に意味をもたせるより、「将来の不安」が貯蓄の理由だというのだから、貯蓄のあるなしではなく、貯蓄など考えずに将来の展望をもって生きられるような国づくりをしてこなかったことのほうを話題にすべきではないのか、というのが山野さんのつぶやきです。

かつて入社するときから信頼していた会社の先輩は、「ほどほどの赤字人生が男のいきざまだよ」と、貯蓄など考えずにきっぱりといい、「きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字暮らしをするもんだ」といい切って、飄々としていたのを思い出すといいます。

察するところ、その先輩はいまは文なしの「下流老人」のひとりとして、細々と暮らしているにちがいない。後輩として山野さんは、赤字まではともかくゼロに終わる人生を納得する覚悟ぐらいはしていますし、将来が不安で自分と子どもたちのためにひたすら貯蓄をしたという出演者の納得顔に出合って画面を消してしまいます。

戦後にみんなが貧しかったときに、みんなで等しく豊かになろうと誓って自分のためには貯蓄といえるほどの貯蓄をしなかった多くの先人が思われます。

「いま貯蓄がなくて暮らしが貧しいからといって、九割中流の社会をつくった功労者

である高齢者に対して、『下流老人』呼ばわりするとはなにごとですか」

ここで山野さんはこらえきれずに声を強めてそういいます。

「戦禍のあと戦後の復興の時期に、個人の貯蓄なんか考えられませんよ。みんなで助け合って支え合ってきたからこそ『九割中流』とか『一億総中流』とかいう平等社会がつくれたのだし、その後もボランティアとして無償の貢献をしている多くの善意の人びとに対して、貯蓄のないこととやかくいするのは失礼ではないですか」

と山野さんは憤懣を収めきれなくなって言い継ぎます。

しごとはほどほどにして、家にFAXを置かずコピーは会社ですませて、確定申告で税金逃がれをし、株式までやってちくさいにつとめていた同じ団塊のMの顔が浮かびます。

「変なヤツと置いていたあいつが人生の勝利者かよ」

山野さんは先輩から引き継いだしごとはとことんやってきたと自負しているし、これからもまだ何かとやるつもりでいます。しかし探すとなると高齢者のしごとは少ない。ここにも高齢社会対策の遅延が露呈していると山野さんはいいます。

家では人並みに応じられない「ツカエナイ親！」としてあしらわれ、おそらく職場では意に沿わない上司として「ツカエナイ上司！」だったのでしよう。

外見はしずかな山野さんの胸中にはいらいらが渦巻いているようです。

「わが家の家計から必要経費以外にまわせる余裕はないですよ」と山野さん。  
定年を迎えて、住民税を払って、急に軽くなった退職金の残りを、家の修理や夫婦で小旅行をするよりも自分が先に痛んだ場合に妻が介護にかかる費用に当てようと思っているといっています。

\* 胸のなかに生きる総中流社会

誰もいない居間のソファの真ん中に座って、テレビを消して、山野さんは身の回りを見えます。

本だなの本が動いていない。家具はどれも二〇世紀の中古品ばかり。一方、日々の暮らしの表面を流れていく日用品はコンビニ・百均(DAISU)・スーパーもの。

ふだんの衣装はユニクロ(UNIQLO)かアジア途上国製品です。妻の持ち物の中にはブランド品もあって、ルイ・ヴィトン(LOUIS VUITTON)やプラダ(PRADA)やディオール(DIOR)やシャネル(CHANEL)など男性にもわかるものもあります。しかし少数のブランド品と普段のスーパー品とのアンバランスに、夫である自分への無言の不満が隠されているように思えます。

自分のブランド品といえるものは後にも先にもオメガ(OMEGA 終わりの意)の腕時計だけ。家族を優先してきたことでのみずからの専用品の欠落を、みずからのため



に生きることの自負のなさではないかとさえ思うこともあるのです。

気づいてみたら「マイホーム」のかたちはなくなり、家庭内で孤立し、双六の上がり近づくどころかふり出しにもどるような感覚で暮らしています。おカネに余裕がなくて自由に動けない、子どもたちは近くにいない、病気にまわれはじめているし、肉体的な力の衰えは隠せない、先行ききびしい日時を思うと孤立感と不安がつのつてくる。

青木さんと「介護付き有料老人ホーム」の見学にいった妻を送り出して、わが家について「ホームレス」とさほど遠くない侘びしさを感じている戦後ツ子の「マイホームパパ」。余生を穏やかにすごすステージが家庭の内にも外にもなくなっていく気配。というよりこれまでもなかったのに気づかなかっただけのこと。テレビのチャンネル権はなかったし、というより見るに値する番組がない。ラジオは深夜便にスイッチをいれて、ほっとするいい人の話や音楽とめぐりあうことがあります、夜ふかしは体にいけませんし。クルマは一台で自由に使えません。というより子どもたちのようにあちこち行く場所がないですし。しかし車検・整備・ガソリン・JAF費用まですべて親持ちでした。いまでも免許はかえさずに、妻のスーパーでの買い物運転手をつとめています。食事は自分では作りようがないから外食時代に好きだったものも食べられない。これがつらい。

街なかに高齢者用の「居場所」や「通い場所」が増えていると『高齢社会白書』では述べていますが、身近にはありません。むしろ高齢者が出入りしづらい場が増えていくように思えます。聞けば仲間も同様で、会社でのしごとがなくなつて、家にも居場所がなくなつて、内向きの「ホームレス」気分になる。といつて屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか、公共図書館か、パチンコ屋の休憩室くらい。だからウォーキングでいらいらを解消するしかありません。元氣なのに「マイホームパパ」のこれからに明るい兆しなどどこにも見えないのです。

### 一人暮らしに備えるマイホームママ

口にも態度にも現わすことがなくとも、侘びしさは「団塊」世代の「マイホームママ」の心のうちにもあるのです。

山野夫人は子どものPTAらしいの友人たちとの雑談はたのしみになっていますが、ふるさとがそれぞれに異なるので話しませんし、仲間のだれもが子どもに世話になるつもりはないといい、長年連れ添った夫の介護をつとめたあと、「マイホーム」で一人暮らしをして終わる。そんなプロセスを自分にも見えています。

外からは見えないけれども、人にはいわないけれども、同じ悩みをかかえている団地住まいの「マイホームママ」には案外に多いのです。大戦後の復興期から高度成長

期にかけて、都会に出て企業を支えた男性の妻として形づくってきた家族のあり方として、一人暮らしに耐えて暮らす「マイホームママ」とともに終わります。

高齢期になってもつづいている地元のPTA以来の仲間とのファミレス談議や公民館活動の趣味の会やNPOの手伝いなどで日々を過ごしており、しごと・子育てで多忙な子どもにこちらから支援を頼むことはしない。嫁にまわりつく慣習を避けて姑から自立した人生を送ってきたみずからの姿勢を崩すことになるからです。

山野夫人は、団地自治会副会長で、九四歳の母親と入居を予定している青木さんと介護付き有料老人ホームの見学にいき、いつもとは違う青木さんの話を聞きました。

\*かあさんは許さない

「わたしの母は人生に二度も国に放り出されたのよ、国の政策不在によって」  
そう青木さんは淡々といいます。

「一度目は中国東北で、みずから生きよとして放り出され、二度目は国の支援を受けないでみずから生きるとして選んで・・・」

細部には触れませんが、大正生まれの母親の苦勞の多かった人生にやさしく連れ添おうという思いがよくわかると思います。

「・・・でもいいのよ、母さんは口ずさむ大好きな童謡がたくさんあって」

青木さんの母親を慰め支えているのは、国の政策ではなく母親から教わった童謡だといえます。軍歌とどろくなかでも失わなかったやさしい心を支えてくれた数々の童謡。

「春の小川」「鯉のぼり」「海」「朧月夜」「故郷」「浜辺の歌」「宵待草」「背くらべ」「靴が鳴る」「叱られて」「七つの子」「赤とんぼ」「砂山」「からたちの花」「あの町この町」・・・。

みんな大正生まれの童謡・唱歌たちです。声に出さなくとも胸の中をいつでも流れているのだそうです。

「歴史は学ばない者によって繰り返し、学んだ者によって繰り返す」

というのは高校の歴史の教師を長く勤めた父から何度も繰り返し聞いたことばだといえます。青木さんが父から聞いた「歴史から学ぶ」というのは、国を孤立させないこと（とくに近隣諸国）、国防を軍に頼らない国民意識の醸成、熱しない冷静な世論、そして何よりも国民の中に格差を認める世相をつくらないことだといいました。

幸せにも父はそういう国に生きて、それを見定めて去りました。これまで七〇年は曲がりなりにも父が言っていたような国であったのに、現政権はそのどれに対しても反っていて歴史を危うくしているといえます。憲法の平和条項に自衛隊を書きこむなどという、また戦争という事態を想定させる動きをみせる男たちに対して、生命を生

み育てる女性の側からの告発として、

「かあさんは許さない」

と老母はいうのです。九〇歳を過ぎた青木さんの母親は、

「でも、かあさんは許さない」

思い出したように、青木さんの老母は実感をこめてそういうのだそうです。

山野さんは自分は老人ホームにいくつもりはないが青木夫人との見学に同意したのは、自分が先に逝ったあとの選択肢のひとつとして。子どもたちはふたりとも戻ってこない。むすこはフィアンセの実家がある九州にしごとを移してしまつたし、留学先のカナダで結婚した娘にも残してあげるほど資産ではないから、いずれは一人暮らし同士の青木さんと老い先知れない日々を送るために処分することもありうるとして。山野夫妻の老々介護の日々はまだつづきます。

### 大正生まれへのオマージュ（賛辞）

先の第二次大戦の敗戦（戦禍）を二〇歳〜三四歳で迎えた大正生まれの人びと。亡くなった人や傷ついた仲間の分まで合わせて三人分も働いて、みんなして等しく豊かになろうとした苦闘の年月。みんなで貧しさを分かち合い、自分のための貯蓄など考えもしなかった人びと。そんな戦後復興の功労者に対して、貯蓄がないゆえに「下流

老人」と呼び「老後破産」と評するとは何たることですか。

戦禍のあと「ほどほどの赤字人生が男の生きざま（美学）だよ」といって貯蓄するよりは周りの人びとへの心づかいにおカネを使ってきた善意の人びとに貯蓄がないのはあたり前。そういう人びとが多くいて、みんなの暮らしに格差が生じないことに配慮したからこそ、史上にまれな「九割中流」の平等社会がくれたのです。ですから、後人にどういわれても自分たちのたどる「一〇〇年人生」に誇りこそあれ後悔はないでしょう。

「下流老人」と呼ばれようと、一日一〇〇円でも生き抜く覚悟があり自負があり、ひもじさと貧しさからはじまって最後にまた貧しさとひもじさにもどって終わる人生を、わが人生として受け容れて、いまさら国や自治体からの支援・救済を求めない人びとなのです。それが「一〇〇年人生」を生きる「大正人」の心意気なのです。

#### \* 「大正生まれ」の歌

「大正生まれ」の歌は一九七六年にテイチクからレコードが出されています。作詞者の小林朗（こばやし・あきら）さんは大正一四年生まれ。二〇〇九年二月二日に亡くなりました。

「大正生まれ」 小林朗作詞 大野正雄作曲

♪大正生まれの俺達は 明治の親父に育てられ  
忠君愛国そのままに お国の為に働いて  
みんなの為に死んでゆきや 日本男子の本懐と  
覚悟は決めていた なぁお前… 略

「大正生まれ（女性編）」 小林朗作詞 大野正雄作曲

♪大正生まれのわたし達 明治の母に育てられ  
勤労奉仕はあたりまえ 国防婦人のたすきがけ  
みんなの為にとがんばった

これぞ大和撫子と 覚悟を決めていた ねえあなた… 略

「大正生まれ（女性編）」の歌は一九七九年にテイチクからレコードが出されています。

## II 女性主導のライフ&ワーク

### M字型から一文字型への永年就労

「一〇〇年の平和」のもとでの一人ひとりの「一〇〇年人生」には「一〇〇年の家族」があり「一〇〇年の住居」があります。

国民の生き方の基本であり重要事項ですが、家庭（家族と住宅）の一〇〇〇年は国の骨格をつくる最小単位として安定して堅牢な形が求められます。

日ごろ暮らしている住まいは、家族に対する考え方やさまざまな事情から遠居、近居、隣居、同居、同等同居といったさまざまな形をとっています。特徴として整理すると、二〇世紀後半の高度成長期を支えた大都市集中型・大規模マスプロ企業活動とその社員のための「マイホーム」住宅での四人家族が標準とされました。

二一世紀の暮らしはどう考えてどうしたらいいのでしょうか。

、前世紀の大都市集中型とは異なつて、地方都市分散型の中規模地産事業をめぐる「三世代同居型」住宅での標準六人家族への転回が図られると想定されるのです。それは地方都市を核にして特性を活かした事業を中心にして三世代それぞれが活躍できる経済社会の展開であり、「三世代同居型」住宅での女系の家庭が主流となると想定されているからです。

内閣府の「人生一〇〇年時代構想会議」でのリンダ・グラットン女史の発言でも八〇歳まで働く社会での「家族」構成の変化が指摘されています。働き手が男性中心というよりも共働きがあたりまえになり、加えて結婚しないで働く女性が増えて女性の労働参加率の上昇が見込まれるといえます。これまでの日本の家庭と企業の骨組みを不安定にせずにごう変えていくことができるかが課題となります。



それは「二世帯三世帯同等同居」住宅が解決策を示しています。

そんな家づくりをめざすことにした渡辺家のようすとご意見を聞いてみようと思います。もちろんすべての家庭でということではなく、新しい時代の家庭の姿を考える上での実例として。

渡辺家では、娘がしごとを続けながら第二子の出産を実現することを主な理由にして、「二世帯三世帯住宅」にすることにしました。これは出生率二・〇への一族の選択であると同時に渡辺家三世帯一〇〇年を見通した選択という要素を含んでいます。

かつて大都市に出て、「マイホーム」で姑に煩わせられずに専業主婦の座を得た母世代の「核家族」指向から、女性の社会参加を部分的に可能にした「M字型」就労の過渡的なプロセスを経て、これからは専業課長から上級職をめざす女性による「一文字型」の就労による「二世帯三世帯同居」へのJ字型ターンを達成すること、渡辺さんは自分にとっても渡辺家にとっても将来が開ける選択をしたということです。

渡辺さんも「団塊」のひとり。中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをして、中核都市郊外に団地時代よりやや広い一戸建住宅を購入して転居しました。典型的な三LDKタイプで「二世帯四人」までが精いっぱい。このままでは「二世帯三世帯住宅」にはなりません。

夫婦二人きりになって、子どもがそれぞれに結婚して自立した後は、いわゆるエン

プティ・ネスト（空の巣）状態で暮らすつもりでいました。敷地の隅に二人の子どもが卒業記念に地元小学校からもらってきた梅を植えてあります。二本とも競うように成長して実をつけるようになり花のころにはご近所の方が見上げて過ぎる姿も見受けられます。そんなときは植えたときのことを思い出します。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なりますが、子育て期のいくつもの課題や困難をクリアしてきた感慨のスペースであるとともに、この狭い実家はなお近居している娘にとっては生活戦略にかかわるスペースでもあるのです。

孫はかぎりなくかわいい。

子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、祖父母として、わが家の三代目を養育する場を用意することになります。「近居」の場合は離れている分だけ独立とプライバシーは損われないのですが、離れている分だけ問題回避の接触となります。幼い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらししてくれる。そこで出会いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになります。

きちつとした「孫育て」には限界を感じていますが、現状では「近居」が「しあわせ家族」の標準とされていることにも、「隣居」は敷地に相応の余裕がないとかないません。そこで渡辺家は思い切って「二世帯三世帯同居」の住宅への建て替えをめざ

すことにしました。渡辺さんの娘は二五歳で第一子を産んだあと、予定だった第二子の出産期をはずしてしまい、あとは先延ばしして三〇歳代になって最近それを実現をすべき兆候があつて。

\*「実家依存症」といわれても

ひとりっ子のままですと「少子化」です。それに歯止めをかけるつもりもあつて、三〇歳の大台に乗ってその兆候があつて、なんとか二人目をと覚悟はきめても、収入が不安定になれば将来の養育・教育費が重圧になるのは目に見えています。M字型になるのではとやめられません。

学費は公立でも約一〇〇万円、私立だと約二三〇〇万円かかるといいますし、政府がいう全額支給が可能と思えないのは、奨学金返済に苦労してきた先輩が不公平をそのままにはしないでしようし、いずれ福祉のどこかが削られることになるので、しわよせは高齢者のところへやってきました。就学までの時期のたいへんさを思い、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を聞けば、不安はつのります。そこで「カーさん手を借して」ということになります。

ところが世間では子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねないのです。

国はこれまで夫婦ふたりによる「マイホーム」での子育てを「エンゼル・プラン」（文部、厚生、労働、建設の四省大臣合意により平成六年Ⅱ一九九四年一二月に策定）以来の目標として推奨してきたし、若いカップルを対象にして養育のしごとをしている専門職の側からは、祖父母の参入は歓迎されていないのです。

当事者でないみなさんは驚かないでください。

「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では、養育の立場で支援する「地域の高齢者」はおりますが、「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていないのです。子育ては大都市でも地方の実家での子育てでも夫婦ふたりに任されています。

それでも祖父母は必要に応じて孫の養育に参入していますが、このままではわが家三代の暮らしの知恵を孫世代にと考えても宙に浮いてしまうところまできているのです。さまざまな事情があって、「マイホーム」での子育てから祖父母は排除されているのです。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦はこのほか多いのです。

### 「三世代平等同居」を標準に

まさかと思うでしょうが、わが国の「親子の接触」が諸外国と比べて少なくなっ

いるのです。

このところの趨勢としては「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（六〇歳以上）の四〇%が同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台になっていきます。

どこの国も骨格である「家庭」と「企業」と「自治体」が堅牢であり柔軟なことが、安定した国家であることにかわりはありません。「家庭」はわが国では、江戸時代を引き継いだ明治く大正期はなお大家族でした。地方の住居は何百年ももつ大黒柱のある家屋で、大黒柱を男性（長子）が戸主として背負い、女性（嫁）の忍従によって成り立っていたといわれます。

「三従四徳」が封建社会の女性の礼教育としていわれました。

「三従」は未婚の時は父に従い、既婚時は夫に従い、そして夫が死んだあとは子に従うこと。「四徳」は婦徳、婦言、婦容、婦功で、良家の娘たちはこれを徹底的に教え込まれました。とはいえ「三従四徳すこしも学ばず」や「三従四徳まるでダメ」という良家の快女たちもたくさんいたのです。

大戦後のわが国の家庭では、「女性解放と男女同権が封建的」な制度の打破の課題となりましたが、都市生活の手ぜまなニDKの「マイホーム」での暮らしが、「嫁・姑」のしがらみから若い女性を解放したのです。それはまた同時に「祖父母」から

孫の養育を切り離すことになりました。

プロセスとして七〇年、現状で見るかぎり、「マイホーム」は新しい国の骨格となる継続的で安定した家族の形をつくれなかつたようです。

では二一世紀の新しい家族の形は？

この国の骨組みとしての家族のありようとして、「二世帯三世帯同居」へのＪター  
ンがすでに始まっています。

この国に伝来の暮らし方として、三世帯同居による「わが家三代の暮らしの知恵」は途切れずに生きつづけることになります。その必要性は高齢になったマイホームパパとママが実感しているところです。やさしいおじいちゃん、おばあちゃんに育てられた子どもたちは、けっして陰湿ないじめっ子にはならないでしょう。正義感の強いガキ大将に育って、街の骨格を強くしていくでしょう。

「わが家三代の暮らしの知恵」をしっかり子孫に伝えるには、二世帯同居はどうしても必要な暮らし方であり、「三世帯同等同居」住宅は安定した住環境なのです。

ここでいい出すまでもなく、政府は「一億総活躍社会」の具体的目標に掲げている「希望出生率一・八」に向けた少子化対策として、「三世帯住宅」の新築または中古住宅の増築に対する補助事業を開始しました。安心して子どもを育てられる環境整備の手段として、世代間の助け合いを図るための「三世帯同居」を促進する税制上の軽

減措置を講ずること。国土交通省住宅局住宅生産課（木造住宅振興室）がすすめる三世代同居に対応した良質な木造住宅の整備の促進（地域型住宅グリーン化事業の拡充）もそのひとつです。

三世代同居を目的として自ら所有し居住する住宅の三世代同居を増やすために、県レベルでは、石川県「三世代ファミリー同居・近居促進事業」ほか福島県、富山県、鳥取県、長崎県などで同様の支援を。市レベルでは、熊谷市・蕨市の「三世代ふれあい家族住宅支援事業」、つくばみらい市の「三世代で同居・近居するための住宅支援事業」、綾瀬市・高槻市の「三世代ファミリー定住支援事業」、四街道市・本巢市・砺波市・小牧市・やまぐち市の「三世代同居・近居住宅支援事業」、大分市の「三世代近居・同居ハッピーライフ推進事業」、輪島市の「三世代ファミリー同居・近居促進事業」、千葉市、大田原市、品川区、稲敷市、郡上市、防府市、横手市、山鹿市、黒部市、大分市、篠山市・などと同様の支援をすすめています。

大都市近郊や中小都市でのこういう傾向は、地方創生の流れのなかで顕著になっています。多世代利用型の超長期住宅あるいは長寿命型（長期優良住宅・新築木造）など力点は異なってもめざすところは同じです。

多世代が長期にわたり利用する安定した住宅の広がりには、街並みを安定化し、安定した「家族」への支援となるものであり、何より建築技術的に可能だからです。

\* 近居・隣居より同居が最良

中核都市の郊外に住む渡辺さん夫妻は、近居して子育てをしてきた娘家族からの要望があつて、「二世帯三世帯同居」型の住居への建て替えをすすめています。

覚悟という大げさに聞こえるでしょうが、目をつむつても、どこに何があるかで分かっている住宅から、新たな暮らしへの転換は、やはり覚悟がいるといえます。地方のお宅なら、敷地内での「隣居」が可能でしょうが、都市郊外の住宅の場合は残念ですが、そこまでの土地の余裕がありません。だから建て替えになります。

「三世帯住宅」についてメーカーを通じて調べてみると、事例は少なくはないし、各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っています。住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されています。渡辺さん夫妻にはこれが魅力なのです。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・などが実現されています。

「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもあります。

すでに建て替えて「三世帯同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提



供しているメーカーもあります。そこで渡辺さん夫妻は訪問会に参加してみました。

大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居ですから外形も安定しています。

当主夫妻のほかには高校生の娘さんと義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあって、サザエさんのオムコさん「マスオさん」型の男性として「三世同居」を成立させながら、サザエさん一家のマスオさんよりはずっと存在感があるご主人に見受けられたそうです。

上下階の雰囲気の違いを感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからでしょう。「三世同居型」住宅として申し分ないのですが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったといえます。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。この年の一月に「高齢社会対策基本法」が成立した）が出て二五年になります。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもつとも進んでいる業界です。住宅メーカーによって取り組み方は異なりますが、どこも「二世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積しています。

そこまでは結構なのですが、せっかくの二世帯同居型住宅にもかかわらず、メーカーの小冊子のモデル設計には、共用スペースのつくりつけが「ミドル+ジュニア」主

体に寄りがちになっています。高齢世帯の「離れた和室ひと部屋への引きこもり」（二世代＋<sup>2</sup>）が推測できるものが多くみられます。ここにも高齢期が「余生」であるという旧来の高齢者意識が濃く反映されています。これではほんとうの高齢化時代の三世代同等型住宅とはいえないのです。

「第三期の現役人生」の主役として、これから二〇年余の長い高齢期を「円熟人生」としてと暮らす家ではない、と渡辺さんは気づいています。

### 暮らしの知恵を次世代に伝える

ここは妻であり子の母であり孫たちの祖母であるバーバちゃんの出番です。

わが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての居間（共有スペース）。そこを中心にして周りへ「三世代」のプライベート・スペース。孫の成長に寄り添える孫との接点をもつ居間への動線。母と娘とが共有する台所への動線。実質的主人であるジージとバーバの工夫を織り込んだ「三世代同居」住居を実現すべく渡辺家は設計には関わっています。いまは三世代六人が揃っていないけれども、三世代六人が等しく扱われる同居住宅が「三世代同居」住宅（長いので「三同居型住宅」と呼ぶ）です。

「家族みんなで考えているいろ解決することができますから」

と、渡辺さん夫妻は親・子・孫三代が出くわすさまざまな場面での対処にも気をくばっています。

とくに娘の女性としてのライフステージからの発想が重要になります。先に女性の「三従」を取り上げましたが、女性の「三同」はあっていい視点です。未婚時は両親と、既婚時は夫と、夫が先に亡くなったあとは子孫との同居を想定して、女性の人生を中心の「住まい」のありようを考えます。

「三同」を志向するかぎり、女性同士の接点と継続性は形においてしっかり確保されねばなりません。とくにしごとを持つ娘の希望は微細に活かされなければならず、「三世代同居」の形として女系三代の人生が標準住宅として表現されることになります。ミレニアム（千年紀）の幅で過ごした男尊女卑に対して男女平等から始めるのでは不公平でしょう。せめてセンチリー（世紀）の幅つまり「一〇〇年人生」を得た男性が女尊男卑型の男女平等を受容して馴らしていくことになるでしょう。

「三同同型住宅」を実現できる渡辺家は、「超」がつくほどの「しあわせ家族」ですが、国の骨格になる街のたたずまいとして「三同同型住宅」は多くあっていい住宅の形であり、優遇措置を講じて地方創生を担う次世代のための居場所を確保することになります。国の骨格と筋肉を形づくる強くてたおやかな国民性は、「三世代同居」の家族によって培われて継承されていくのですから。

「三同同型住宅」の標準化のために、国や自治体はできるかぎりの優遇措置をおこな  
い、建設業者はノウハウを蓄積し、企業は女性社員の地元勤務型キャリアの設置と  
もに子育て期でも女性が能力を十分に発揮できるように支援をする。いわゆる女性社  
員の六割にも及んでいたという結婚時の「寿退社」とその後の「M字型」就業。これ  
にかわって専門職をはずれずに高年齢まで「一文字」型にしごとに集中できる女性が  
人材として処遇されることとなります。

いうまでもなく、全国の中小都市を独自の泉眼とする「一〇〇年人生」時代の「一  
〇〇年住宅」をブームにできれば、大都市の介護付き老人ホームとは別筋の内需を起  
こすことができるでしょう。

#### \*「ジージ」を自慢するジュニア

「近居」よりも「隣居」よりも、「三世代同等同居」によつて、女系のつながりを有  
効に活かしながら「わが家の暮らしの知恵」を次世代に伝えることが可能になります。

母と娘がやりとりする生活感の継続性、祖父母と接することによつてもたらされる  
孫世代への生活知識の共有のメリットには計り知れないものがあります。中期の父  
と母はともに充実してしごとに向かい、祖父母と孫たちは家の内でも外でもそれぞれ  
のエイジングの時をともにすることになります。

「うちのジージがね」

とって、ジージから教わった暮らしの知恵や悪知恵をなかに自慢するジュニアが四分の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまいます。

次世代の成長を見守る高齢者がいて、高齢者をたいせつに思うジュニアが育つ場をもつ家庭。「三同同型一〇〇年（センチュリー）住宅」は、「三世代平等長寿社会」を豊かにするための苗床であるとともに、三世代同居を「標準家族」として家族の絆を強くしながらそれぞれが個性を育てていく「家庭」の創成であり、とくに家族と安心して暮らせる女性が真一文字の就労によって能力が発揮できるステージをもつ家庭の先駆けといえるでしょう。安定した街並みづくりにも一役を努めて。

国と自治体は骨組みの基礎である「街並み」「家づくり」について、二一世紀前半をかけての重要施策として、そういう三代の知恵を伝えあえる家族づくり、家づくりにむかう「平和団塊」世代の家庭が、少なくとも四分の一はあるような「家族のかたち」が街のかたち」が生きる「まちづくり」に配慮すべきでしょう。村が町が市が国が強固で柔軟な「日本」であることのために。